マハートマ・レターズ

（A・P・シネットへの大師たちの手紙）

A・T・バーカー：編　　星野 未来：訳

はじめに

神智学やオカルティズムを学ぶ人たちの間では、1875年の神智学協会設立直後の16年間に、神智学協会を通じて世界に与えられた哲学的な教義や倫理は、チベットのヒマラヤ山脈を越えたところに住むオカルト同胞団に属するとされる、ある東洋の教師から発せられたものであることはよく知られている。H・P・ブラヴァツキーはオルコット大佐とともに神智学協会を設立したが、この東洋のブラザーたちを自分の師匠として認め、彼らが存在するというだけでなく、ブラヴァツキー自身がチベット滞在中に彼らの手で訓練と指導を受けたので、自分の知識と個人的な経験から話すことができると述べた。さらに詳しい証言が得られたのは1880年になってからである。その年、当時インドに住んでいた故A・P・シネットは、ブラヴァツキー夫人の仲介により、彼女が「ブラザー」「マハートマ」、後には「智慧の大師」と呼んでいた自分の師と文通することができたのである。シネット氏は1880年から1884年までの文通の間に、当の師匠であるマハートマMとマハートマKHから多くの手紙を受け取っており、これらの手紙を「マハートマ・レターズ」というタイトルで本巻に掲載している。これらの手紙を受け取った経緯については、シネット氏が「オカルト・ワールド」の中で十分に説明しているので、ここで改めて説明する必要はないだろう。

この書簡は、無条件で遺贈された故A・P・シネットの遺言執行者の許可を得て出版されている。遺言執行者は、この「はじめに」の執筆者の提案により、書簡の書写、整理、書籍形式での出版の全責任を負うという大きな特権を与えられた。

筆者は、神智学協会の最高の利益のために、シネット氏に与えられた『マスターの教え』を完全に出版することが必要な時が来たと確信し、自分の行動に伴う重大な責任を十分に感じながら、この仕事を引き受けた。この本に収められている手紙の中に、マスターKHが、自分もブラザーのMも決してこの出版を許さないと言っている一節があるので、シネット氏はその責任をより強く感じている。これらの手紙が書かれた当時、出版を目的としていなかったことは疑いの余地がないが、現在の協会の行き詰まりも予想されていなかったと考えてよいだろう。何がマスターたちのオリジナルの教えであり、何がそうでなかったのかについて多くの論争があるときに、自らの師匠の言葉を出版することは、"There is no religion higher than Truth"（真理にまさる宗教なし）をモットーとする大きな運動の最高の利益に貢献する以外の何ものでもない。マスターたちはマスターたちであり、彼らが書いたものは彼らが書いたものであり、彼らも彼らの教義も、劣った心を持つ人々の称賛や謝罪を必要としない。

編集された抜粋本を研究するだけでは、事実に到達することはもちろん、これほどまでに広範なテーマについて信頼できる意見を形成することさえほとんど不可能である。したがって、神智学協会の会員や世界全体が、書き手自身の手で署名されたこれらの手紙に記載されているマスターとその教義に関する真実を、自分自身で研究できるようにすることが、編集者（\*注）の目的である。この目的のために、シネット氏が残したマハートマの書簡はすべて、原文から逐語的に転記されており、省略されていない。

（\*注）バーカーの訂正「マハトマ・レターズの執筆」の最後から２番目の段落を参照。

シネット氏の著書”The Occult World”と”Esoteric Buddhism”は、この巻のセクション１と２に記載されている内容にほぼ完全に基づいている。現代の神智学の著書と同様に、これらの初期の著作で与えられた教えの説明を注意深く研究すると、これらの手紙に含まれている元の教えと比較したときにいくつかの興味深い結果が得られる。現代の神智学の教義として受け入れられている多くの理論は、不正確で誤解を招くものであることが明らかに示されており、したがって読者に相違点の主要なポイントを示すことができれば有益であろう。

この12年間の協会では、儀式、慣習、教会、信条、およびそれらに相当するものに過度に依存する傾向が強まっており、その結果、運動の初期に顕著であった個人の努力と自由な思考の活力が犠牲になっていることを認めざるを得ない。マスターKHはこの問題について非常に明確な言葉で書いているので、その言葉を引用するのがよいだろう。「そして今、自然なことであり、避けることができない悪を十分に考慮した後で......。私は、その原因が力を持つようになって以来、人類を追いかけている悪の３分の２近くの最大の、主な原因を指摘しよう。それは、どのような形であれ、どのような国であれ、宗教です。人間が神聖視するこれらの幻影の中にこそ、人類の大きな呪いであり、人類をほとんど圧倒している多数の悪の源を探さなければならないのです。無知が神々を生み、狡猾がその機会を利用したのです」(手紙No.10）。そしてまた「将来、神官に支配された世界を圧迫するために、新しいヒエラルキーを構築することは、私たちの考えから遠く離れているかもしれません」（手紙No.87）。これらの言葉の現代における推論とメッセージは十分に明らかである。

協会の一部は、マスターKHが「迷信の中でも最も非常識で致命的なもの、スピリチュアリズム」と呼ぶものに傾いている傾向も顕著である。(手紙No.49)

別の手紙では、「サイキックな協会が設立されている。それは成長し、発展し、拡大し、最終的にはロンドンの神智学協会がその中に飲み込まれ、まずその影響力を失い、次にその名前を失い、神智学という名前自体が過去のものになってしまうでしょう」と書いてある。この言葉が書かれた時と同じように、今日でも真実であることは残念なことである。この手紙の中では、問題の全体像があらゆる観点から論じられており、公平な学徒の心には誤解が生じないようになっている。問題は、当時も今も、霊的現象の本当の性質を誤解していることにある。スピリチュアリズムの手法を信奉する人々は、適切な資格を持った霊媒によって、亡き人の魂や霊とのコミュニケーションが成立すると主張している。生者と死者の間である種のコミュニケーションが可能であることは、この手紙の中で実証可能な事実として受け入れられており、何ら異議を唱えるものではない。しかし、何と交信するのか？

ここに、この問題の核心がある。マスターKHは一度だけでなく何度も何度も、死者の魂や霊とのコミュニケーションは不可能だと述べている。死によって、人間の第７、第６、第５の原理に関わる意識（これらの中には、魂、霊、人間を人間たらしめているすべてのものが含まれる）は、デヴァチャン（天界）に生まれ変わる前の無意識の妊娠期間に引きこもるのである。肉体が物質的世界における意識の乗り物であるのと同様に、肉体の後には、肉体の遺体、それに対応するエーテルの遺体、そして最後に感情とメンタルの遺体が残るが、これは肉体のより微細な物質に対応するものであり、それぞれの段階における意識の乗り物と呼ぶことができる。しかし、これらの空（から）の殻のそれぞれは、それ自体のある種の幻影的な認識または意識を持っていることを明確に理解しなければならない。それは、それらが構成されている原子や分子の集合体の集合意識であり、人生においてそれらを形作った（informed）自我または実在物の意識とは全く異なるものである。肉体にも同様の意識があり、それは純粋に動物的で本能的なものである。死の際には、抜け殻の意識さえも一時的に離れ、第５、第６、第７の原理の撤退が完了するまで、抜け殻には戻らない。霊媒の努力によって一時的に活動を開始することができるのは、これらの崩壊した死体である。これらの死体はコミュニケーションをとることができ、また実際にコミュニケーションをとるが、それはいわば過去の記憶からであり、現在の事実の意識からではない。これが、真の知識を求める人をうんざりさせる、死の向こう側からの愚かで意味のない、非精神的なメッセージの理由である。上記の簡単な分析は、一方では事故や自殺の犠牲者を除いて、他方では不死を勝ち取った稀な個人（訓練されたオカルティストだけがその稀さを知っている）を除いて、すべての人類のルールである。

亡き天文学者から「地上での肉体の使用を放棄した聖職者」（”Esoteric Buddhism” 第8版133ページ）に至るまでの化身していない存在に、霊媒やウィジャボード（訳注：コックリさんのようなもの）などの方法で導かれていると信じている自称「オカルティズム」の学習者は、この手紙に照らして自分の立場を考えてみるといいだろう。すでに示されているように、亡くなったセオソフィスト（すなわち実在の人物）とのコミュニケーションは不可能である。残念ながら、人類を支配する一般的な規則の例外は非常に少ないため、彼らは不死を達成した人々の中に含まれることはない。インスピレーションを求める源をこのように外部化することで、学徒は精神的な達成と直接の知識という壮大な現実の可能性をすべて犠牲にしていることは、いくら強調してもしすぎることはない。「すべての原因なき原因である、知ることのできない、認識することのできないカラナだけが、私たちの心の聖なる未踏の地にその神殿と祭壇を持つべきである。その前で礼拝する者は、自分の魂の沈黙と聖なる孤独の中でそうすべきであり、自分の精神を自分と宇宙霊（The Universal Spirit）の間の唯一の媒介者とし、自分の善行を唯一の司祭とし、自分の罪深い意図を「出席者」に対する唯一の目に見える客観的な犠牲者とすべきである」(シークレット・ドクトリン（原典）第1巻p.280)。

　死後の状態に関する教義を正しく理解することの重要性は、マスターKHの「死の秘密の鍵を持つ者は、生命の鍵を持っている」という重要な言葉から判断することができる。死に関する神智学の教義の二重の意味と適用は、見落とされているように思われる。エジプトの「死者の書」にあるように、生から死を経てデヴァチャンに至る魂の通過の象徴の下に、死の苦しみを経て生に至る志願者を正しく理解して再生させる貴重な教えが隠されているのである。

「見習い期間と弟子の身分」と題された区分の手紙は、神秘主義者とオカルティストの両方の心に深く訴えかけるものである。智慧、指導、多くの個人的な詳細、これらすべてが組み合わさって、大師（マスター）たち自身だけでなく、弟子の問題全体に新たな光を投げかけている。40年前に書かれたこのページを読むと、マスターたちへの道は当時と同じように今日も開かれているという確信が得られる。しかし、個人にとっての達成の可能性は、個人的な指導者に従ったり忠誠を誓ったりすることではなく、イデア、つまり基準に妥協なく献身することにあるのである。マスターKHは、この問題について次のように書いている。「英雄を崇拝する傾向が明らかに現れており、私の友人であるあなた自身も、その傾向から完全には解放されていない。……もしあなたがオカルト研究や文学作品を続けたいのであれば、哀れな私自身ではなく、イデアに忠誠を誓うことを学びなさい。何かをしなければならない時、行動する前に私がそれを望むかどうかを決して考えてはいけません……。私は完璧な人間には程遠いので、私がすることすべてにおいて全く誤りがないこととは程遠いです。……あなたは、肉体で行動しているときのアデプトでさえ、人間の不注意によるミスを超えられないことを見てきました」。（手紙No.55）

神智学協会の原則と個々の会員による実践との間に存在する不幸な矛盾によって生じた多くの異常を軽減するために、これらの手紙で強調されているように、マスターは弟子の行動を指導も管理もしないことを覚えておかなければならない。同胞団の規則では、弟子たちには「たとえそれらの原因が時として彼らの〈苦難と公衆のさらし台の刑〉になったとしても、最大限の自由と行動の自由、原因を作る自由」を与えなければならない。「我々のチェラ（弟子）が助けられるのは、彼らをトラブルに巻き込んだ原因が無実であるときだけです」。(手紙No.54）弟子の道は、自然そのものの心の中につながっている。この不変の法則の前では、最高のアデプトでさえ、謙虚に頭を下げなければならない。弟子入りの候補者には、人間にとって自然なことはすべて許される。どんな単純な自然な行為も汚すことはできない。しかし、「オカルト科学は嫉妬深い女主人であり、わがまま勝手の影さえも許さない」。そして、精神的な達成のより高いレベルに到達しようとするならば、弟子は肉体の自然な欲望を犠牲にして超越する覚悟をしなければならず、マスターKH自身の言葉を借りれば、「通常の結婚生活だけでなく、肉やワインを飲むことさえも致命的である」生活を送らなければならないのだ。（手紙No.18）明らかに知られている法則に反論するような定則によって性の問題を解決しようとする人は、最終的に人間的なものすべてを飲み込むべき穴を自分の手で掘っているのである。そのような教義が（自然と一体である）智慧のマスターたちの承認を得られると敢えて示唆することは、神への冒涜であるだけでなく、愚か者や狂人だけが罪を犯すことができる自明の不条理を口にすることなのである。この疑問がオカルティズムを学ぶ一般の人々の心に少しでも疑いを抱かせるならば、占星術の内なる神秘について何かを知っている人々には同じことは言えないだろう。古代の科学は、自然の書物の中にそのような（反対する）公式が存在しないことを証明することができるし、今後も証明されるであろう。また、そのような公式に基づいた理論は、最も悪質な種類の魔術とみなされるだけである。そのような教義が存在することが、今日の協会に活気がない理由の一つである。神智学協会の内部状況を考えると、『シークレット・ドクトリン』（原典第2巻409～415ページ）に書かれている、プロメテウスの崇高な寓話のすべてを、どうしようもなく思い起こさせる。協会の歴史におけるこの重要な時代において、ブラヴァツキー夫人のこのページは、そこに含まれている真実を見ようとしないほど盲目であるか、見たがらないすべての人にとって、最も深い意味に満ちたメッセージを持っている。

死後30年以上経った今、この手紙の中でブラヴァツキー夫人がほとんどすべての点で正当化されていることは驚くべきことである。これほど不当に酷評された人はいないし、彼女をよく知る人の中には、自分が間違っている可能性を一瞬でも認めるよりも、彼女があらゆる種類の誤りを犯したと信じたがる人もいた。シネット氏が遺作となった「ヨーロッパにおける神智学の初期」で描いたように、彼女がどこまで嘘に描かれた人物であったかは、マスターKHの手紙（手紙No.54）を読んでいただければ判断できると思う。H・P・ブラヴァツキーの記憶を、彼女の仕事と彼女が与えた贈り物のために愛している人々は、この手紙を読んだ後、結局のところ彼女は高い評価に値する人物であったと感じずにはいられない。また、その記憶を汚し、彼女が行った仕事の価値を低く評価しようとしてきた人々は、自分たちが悪い非難に相当しないようにとの祈りが叶えば、まさに高みへと昇ることだろう。

火星と水星に関する誤解された理論について、ブラヴァツキー夫人が『シークレット・ドクトリン』の中で説明し、反論したことほど、ブラヴァツキー夫人の正当性が証明されたことはない。この古い論争の詳細は神智学徒にはよく知られているが、シネット氏によって誤解されていた手紙がこの本で出版されたことで、ブラヴァツキー夫人に反対して行われたこの手紙に関する削除を最終的に反論することができたのは幸運なことである。火星と水星が地球と同じ惑星の鎖に属しているという考えを、神智学徒が広めることを許し続けてきたことは、実に驚くべきことである。占星術師の目から見ても、他のオカルト科学分野の学徒から見ても、このような理論は、太陽系のすべてのシステムと対応の規模を混乱させるに違いないことは明らかであり、この事実だけでも、この理論が誤りであることを示すのに十分である。

しかし、単に事実を主張するだけでは不十分であり、この論争全体を最初から詳細に検討する必要がある。この問題にさらに踏み込みたい方は、本巻末の付録に収録されている論文を参照していただきたい。そこでは、すべての事実が筆者によって完全に取り扱われており、筆者は結論的に信じている。

神智学協会の生涯の中で、一つのサイクルが閉じつつあり、読者がこの本を開く前にそのサイクルは必然的な結末を迎えているだろう。このサイクルは、やらない方がよかったことをやってしまったという遺産や、間違った熱意や無駄になった機会の記録を残しており、それを誇りに思う人はほとんどいないだろう。黎明期の活発な新しい生命が古い身体の血管を流れ始めているが、それは必然的に、真の進歩を妨げる性質のものがすべて含まれていることを客観化し、明らかにしている。マスターKHが「支部や個人が滅びることはあっても、協会が滅びることはない」と言ったのなら、「新しいワインは古い瓶には注げない」「自分の命を見つけようとする者は、まずそれを失わなければならない」という、もう一人の師匠の言葉も忘れてはならない。「偽善に対してあなたの警戒を怠ってはならない。なぜなら、隠されているもので明らかにならないものはなく、知られないであろう隠されているものはないからである。また、暗闇で語られたことはすべて光の中で聞かれ、部屋の中でささやかれたことは家のてっぺんから宣言されるであろう。一つの石が他の石の上に残っていても、壊されなければならない日が来ている。惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名のもとにやってきて〈わたしは彼であり、時は近い〉と言うが、彼らについて行ってはならない。戦争や騒乱の話を聞いても、怖がってはいけない。これらは最初に来なければならないが、まだ終わりではない。今は神の復讐の日なのだから。また、太陽、月、星には兆しがあり、一方、地上では、海や波の轟きに狼狽し、困惑し、人の心は宇宙に降りかかるものへの恐れと予兆のために失望するだろう。天球が揺さぶられて、人の子が力と大いなる栄光をもって来るのを見るからである。これらのことが起こり始めたら顔を上げなさい、あなたの解放は遠くないのだから」。

避けられない残骸の中から、不滅の価値を持つ形が生まれるだろう。丘に登り、ビジョンを見て、その清潔で爽やかな空気の中で、夜明けのサイクルの主音（キーノート）を聞いた人たちは、それをしっかりと保持し、来るべき日に、自分たちが見た新鮮さ、美しさ、そして真理を思い出そう。

A・トレバー・バーカー

神智学協会の会員。

1923年9月 ロンドン

＊神智学協会の状況が次第に悪化していったため、筆者は1925年4月に会員を辞退した。